

一般社団法人

東洋音楽学会 沖縄支部通信 NO. 47 (2023年3月31日発行)

Newsletter of the Okinawa Chapter, Society for Research in Asiatic Music

発行：(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部
事務局：〒903-8602 沖縄県那覇市首里当蔵町 1-4
沖縄県立芸術大学音楽学部 小西研究室気付
<http://tog.a.la9.jp/okinawa/index.html>
MAIL: okinawashibu.toyo@gmail.com

【第79回定例研究会記録】

日時：2023年3月4日(土) 13:30~15:30
オンライン開催 (Web 会議ツール Zoom)

研究発表 國吉清昂

「江戸上りから観る琉球古典音楽の考察」

■発表要旨

1. はじめに

三線の音に魅せられ琉球古典音楽の世界へのめり込んだ。その間、三線の演奏について気がかりな面を感じなくなった。小生は、長年高等学校の音楽教師をしていることで「良い音楽表現」とはどういうものなのかを常に念頭に置いて授業に取り組んだ。

古典音楽のコンクールや独演会の独唱が次第に三線の音が細くなっていることを危惧した。このままでは琉球古典音楽の魅力が失われ今後の伝承と継承に危機感を感じた。今回、これらの解決策として体系化してみた。

2. 音楽とは

音楽の起源をルソーは「言語学的起源」とし、K. ザックスは「感情的様式」を経て「旋律の様式」と複合的な様式から生まれたとした。音楽は元々

から己の想いを伝える要素を持っていたことになる。音楽は長い歴史のなかでベートーベンの時代に「大衆化」し、このことが音楽の発展に大きな影響を与え、ホールの改善、良い楽器・有名作曲家の出現、名曲の輩出等音楽界の発展に寄与した。西洋音楽と邦楽の演奏形態には違いはあるが、「良い演奏」や想いを相手に「伝える」のは同一と考える。

3. 江戸上りの演奏

琉球芸能史のなかで慶長の役(1609年)以後の江戸上りはその発展に大きく寄与したことは否めないと思う。江戸上りの使節団は江戸文化を堪能し、琉球文化に咀嚼新釈してきた。『通航一覽琉球国部』に江戸上りの内容が詳細に記録され、一読するに値する。また、使節団は江戸上りの日程が決まると寺社で合宿を行い、芸を磨いた。江戸城の大広間(500畳)で演奏したと。御前演奏に備え用意周到なる準備でもって望んだ。従って、使節団はしっかりと三線を「弾き」しっかりと声を出し「歌った」であろう。

4. 江戸上りからの演奏の継承について

江戸上りの使節団は廃藩置県後市井に降りた。芸能保持者は己の芸を持ち糊口を凌いでいった。その後の録音を通し、先師の歌唱を聴くと三線と歌とのコラボをしていることが解る。金武良仁師、古堅盛保師、幸地亀千代師、中村一雄師(人間国宝)また、心の訴えとして、古謝美佐子、美空ひ

ばり、ルイ・アームストロング。世界最高の歌手として、L. パパロッチェの歌唱は十分に相手に伝えるパフォーマンスを披露している。琉球古典音楽の二大巨星金武良仁師や幸地亀千代師も世界に通用する歌手であると確信している。

5. 琉球古典音楽の今後の課題

- (1) 三線と歌のコラボレーションである。
 - ①三線をしっかり「弾き」声をしっかりと「出して」歌う。
 - ②歌は聴く人に「届ける気持ち」で歌う。
 - ③歌う節の心情を「汲み取り」歌う。
 - ④聲楽譜や三線譜を読み取ることが「最重要」になる。
- (2) 琉球古典音楽の「幽玄」の境地を「堪能」する。
- (3) 芸道は「無限」であること「座右の銘」にすべき。
 - ①師範は通過点である。
- (4) 音楽的表現を追求すること。
 - ①聲楽譜を読み取る。
 - ②三線譜の持つ意味合いを考えて奏する。



(國吉清昂氏の発表)

■傍聴記

國吉清昂氏は沖縄県内で高等学校での音楽教師、合唱団の指導者、および歌三線の演奏者の経験をもとに今回の発表に至ったそうである。問題提起として、國吉氏が10年ほど前から(歌)三線に「演奏力が落ちている」ことに気付き、その解決策として「三線をしっかり弾く」という考えがあったことを語った。

発表の最初のおよそ10分間はヨーロッパでの

音楽の小史や音楽思想についての入門的な話であった。國吉氏によると、「本論は演奏についてなので西洋音楽の観点から考察」という説明があったが、琉球に文化的な影響を与えた中国、アジア諸国の音楽文化の考察がなかったことは少し残念であった。

本発表のタイトルにある「江戸上りに観る琉球古典音楽」の歴史的文献について、先行研究から5分以内に簡素に紹介した。

発表の中心は、1930年代以降の様々な音源を流して進行した。安富祖流の金武良仁が1934年、野村流の幸地亀千代が1950年代、中村一雄氏が平成時代に吹き込んだ「かぎやで風」をZoom会場に聴かせた。

三人の演奏のなかで「歌と三線がコラボしている」と國吉氏は主張したが、時代によるそれぞれの演奏法の違い、三線の弦の材質の影響、三線の調弦の高さ、などの考察をもう少し聞きたかった。また、歌と三線が具体的にどのように「コラボ」していることが、琉球古典音楽においては重要な課題の一つであるので、さらなる考察を期待していた。

今回の発表は「江戸上りに観る琉球古典音楽」がテーマであったので、最後の江戸上りより80年以上経た金武良仁の演奏にどのような変化があったのか、個人的に知りたかった。

発表の後半では、「良い歌」の例として、美空ひばり、ルイ・アームストロング、ルチアーノ・パヴァロッチェの音源を流し、それぞれの歌声に「心の訴え」があることを強調した。

琉球古典音楽にもこれらの名曲と同じような「心の訴え」を求める、といった國吉氏のメッセージには強く共感した。すべての芸術はなんらかの形で「心に訴える」ことは異論なし。芸術学の出発点はその「心の訴え」の具体性を探ることにあるべし。ただ、今回の発表の結論は芸術学の出発点に終わってしまったように感じた。

本講義は、國吉氏の長年の音楽活動、教育者としての経験から観た、実践者としての音楽論を軸に展開された。東洋音楽学会沖縄支部がこのように実践者に発表の場を設ける方向は良いと思うが、

今回、國吉氏の歌三線の生演奏による具体例があったら、「心に訴える」歌い方への理解を深めるような機会となったであろう。

(報告：マツト・ギラン)

シンポジウム

加納マリ・薦田治子・野川美穂子

「芸術祭賞の意味を考える——芸術祭参加公演・参加作品の終了について」

■発表要旨

2022年9月、文化庁のホームページ上に、文化庁芸術祭の参加公演・参加作品の募集および贈賞を今年度（令和4年度）で終了し、来年度（令和5年度）以降は、すぐれた芸術文化活動を行う個人を顕彰する制度をより充実させる方向で検討するという一文が発表された。

2022年度文化庁芸術祭音楽部門の審査員を務める発表者3人は、この急な終了の発表に対し、2022年11月、文化庁に「文化庁芸術祭贈賞の終了とそれに代わる制度に向けての要望書」等一式を提出した。今回のシンポジウムでは、「芸術祭賞の意味を考える」というテーマで、発表者3人がそれぞれ次のような発表を行った。

まず、野川が「芸術祭の概要と参加公演・参加作品の終了について」と題して、文化庁サイトから文化庁芸術祭に関する説明を引用し、その歴史をたどり、現在の芸術祭の概要をまとめた。さらに「要望書」提出に至る経過を説明。今回終了となる参加公演（演劇・音楽・舞踊・大衆芸能部門）と参加作品（テレビ、ラジオ、レコード部門）は、参加者が自ら手を挙げるコンクール方式を採っており、特に音楽部門ではその終了が若手や中堅の演奏家たちの育成にダメージがあること、レコード部門の終了は歴史に残る貴重な音源や資料の記録といった、学術的な作品の制作が行われなくなることの意味すると強調した。また、東洋音楽学会会長名で文化庁長官に提出した要望書（『東洋音楽学会会報』第117号掲載）にも触れた。

次に、加納が「文化庁に提出した要望書につい

て」、要望書には「芸術祭贈賞が果たしてきた役割」と「芸術祭贈賞に代わる今後の制度に望まれること」を織り込んだこと、資料として「ゴール到達者（文化功労者・重要無形文化財保持者（各個認定）のキャリア形成）（邦楽・古典芸能）と山勢松韻師の文化勲章受章に関する新聞記事（芸術祭賞受賞時の感激を述べたもの）を添えたことを示した。さらに、演奏家の意見として、野村峰山師（尺八演奏家）と2022年度芸術祭優秀賞受賞者高島一郎師（箏曲家）の文章を紹介。そこには、キャリア形成を築く段階にある若手や中堅の演奏家にとって芸術祭が目標であったことが述べられている。要望書の後半部分には、芸術選奨の拡充、芸術文化振興基金の演奏会助成、新たなコンクールの開催などを提案したと報告。

最後に、薦田が「今後の対応策についての問題点や提案」を提唱。芸術祭賞終了への対応策として「芸術選奨に統合・拡充」という文化庁担当参事官の発言（2023年2月芸術祭賞贈賞式）を受けて、芸術選奨と芸術祭賞のふたつの顕彰制度について比較検討した。その結果、芸術選奨は、目的の上でも制度の上でも芸術祭賞と異なっており、芸術祭賞の代わりにはなりえないことを明らかにした。そのうえで、今後は、若手、中堅を育てるための新たな制度を作るか、芸術選奨をも含むさまざまな支援策を総合的に組み直す必要があるのではないかと結んだ。

（発表者3人は当学会東日本支部に所属していますが、今回、沖縄支部の例会で、貴重な発表の機会をいただいたことに感謝いたします。）



(シンポジウムの写真)

■傍聴記

本シンポジウムは、文化庁がこれまで毎年主催してきた同庁芸術祭の参加公演・参加作品の募集および贈賞における突然の終了を発端とし、そこから東洋音楽学会名義での「要望書」提出に至る背景や経過を共有することによって、芸術祭賞の意味について議論することを目的に実施された。

発表報告は、東日本支部の加納マリ氏、薦田治子氏、野川美穂子氏の3名それぞれからあり、順序立てて端的に論点がまとめられた。なお、今回もコロナ禍の影響でオンラインでの学会実施であったため、その利点を生かし、支部の垣根を超えた企画であったことも付記しておく。

はじめに野川氏からは、文化庁芸術祭のこれまでの実績と、今回の制度改変に至る概要の整理がなされた。次に加納氏からは、文化庁芸術祭における沖縄の音楽家との歴史的関連や、邦楽家の個別的な主張の紹介を交えながら、「要望書」の内容と、なぜ提出するに至ったかの経緯の説明があった。最後に薦田氏は、これまでの文化庁芸術祭の長所と短所の双方に触れ、芸術祭賞においてはジャンルや地域間の温度差や格差といった問題点があったことについても明らかにしながら、今後予定されている制度改編に対する客観的分析にまで論を展開した。結びに、若手、中堅音楽家の育成やキャリア形成に寄与する政策や制度とはどのようなものか、提言があった。各発表者の報告内容については、前述の発表要旨も参照されたい。

質疑応答の場面では、文化庁芸術祭（レコード部門）参加経験者から、発表者の問題提起に同調するような意見も出た。すなわち、「文化庁芸術祭レコード部門での贈賞が動機づけとなって、競争原理にとらわれず、だからこそ経済的には成り行かないような意欲的なレコード作品も制作することができたので、(今回の制度改編には) 危惧を覚える」というものであった。

その後の質疑応答は、時間が限られ打ち切りとなってしまった。また、そもそも文化庁はなぜ急な制度改変を行ったのか、その実際の理由については議論の余地を残した。しかし本シンポジウム

が契機となり、学会内外で今後さらに議論が深化されていくことが想像される。

そして、学会のあり方として政策提言を行うことの重要性も強く示された。よりよい政策とは何かを協議するため、ときに研究者は外部有識者として行政によって招へいされることが少なくない。しかしながら、実状は形式的な議論だけで、ともすれば恣意的な意思決定を行うための「大義名分」として研究者が利用されることが、これまでであったかもしれない。若手音楽家の育成やキャリア形成を支援する政策や制度とはどのようなものか。社会に対してどう提言していくか。今回の試みでは大いにそれらが示唆されている。

(報告：小川恵祐)

——お知らせ——

① 研究発表の募集と締切日について

エントリー締切日：2023年5月15日（月）

※郵送の場合は同日必着のこと。

注) 5月15日締切の公募にエントリーなされた応募者の発表につきましては、第80回例会（2023年7月中旬頃）での発表予定ですが、応募状況によっては、第81回例会（2024年2月頃予定）での発表となる可能性をお含みおきください。

② 第80回例会情報

開催日時、発表等の仮タイトルにつきましては、2023年6月中旬を目途にご案内さしあげる予定です。

(一社) 東洋音楽学会 沖縄支部通信 No.47 編集委員

小川恵祐、高瀬澄子、多和田真理

塚原健太、三島わかかな

次号 No.48 は 2023年8月に発行予定